
if • • •

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

if・・・

【Nコード】

N4337G

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

もし、灰原哀が灰原哀のまま中学生になっていたら。もし、江戸川コナンが工藤新一に戻った後、探偵を辞め、灰原の通う中学の講師をしていたら。そんなくしも>の一つの未来をイメージして作った短編集です。とはいえ、短編集なので、私の思いつきで書いたものなので、時系列や、設定が微妙に違うかもしれませんが、あまり気にしないでください（笑）<注意>新哀<注意>ちよつと新たん、軟弱ものになってるかもです。いつものかっこいいイメージではないかも。原作派の方はご注意ください。

1、中学講師と片思い

桜もはらはら散る4月上旬。

図書室での逢瀬をはかるのは、セーラー服の美少女と、スーツ姿の社会科講師。

キンコンカンコンコン

高く鳴り打つチャイムの音。

「こんなことしてて、ヤバいんじゃないの？」
「いーんだよ、バレなければ」

だるそうに、少女の『横』で、『本を枕にして』寝るその講師。

「・・・あつたけーな・・・」

陽光が額を照らし、講師は眩しそうに手で顔を覆う。そんな彼に、少女はくすりと口元を緩ませた。

「もう、授業始まっちゃうわよ」

「そーゆうオメーはどうなんだよ」

「私はいいの。生徒だから。貴方とは違うわ」

「生徒だってサボっちゃいけないだろー」

「教師なんてもつとじゃない」

呆れたように眉間を顰めて、少女は軽く講師を睨んだ。

彼は思う。

窓から風がそよぐたびに、少女のスカートの裾がはらりと動くその瞬間。

そして寝ている状態でも、目線の先から少しだけ見える柔らかそうな太腿と。

「・・・やわらかそうだな・・・」

「・・・は？」

怪訝そうに少女は講師を見つめる。

まさか、膝枕させてくれなんて、いえねーよなあ・・・

どこまで成り下がったんだ、エロ講師。だからいつまで経っても『講師』から『教師』になれねーんだよ。

無言のビンタと、彼女特有の冷徹な視線が飛んでくるに決まっている。

講師は淡い欲望を押し殺し、にやり、思わず作り笑いをした。

窓の外の桜の木から、花びらがはらはらと、舞い込んで、頭上にも数枚降ってくる。

ここにいるほんの数十分。

でも、大切な時間。

『工藤先生、工藤先生、授業が始まります。3年 組に至急来て
ください』

ほら、呼ばれた。

「タイムリミット、ね」

くすり、少女が笑う。

離れたくない、この時間。
一方的なのか。はたまた、フリをしているだけなのか。押さえて

いるだけなのか。いつも、彼女はそっけない。追いかける恋であっても、いい。それでも、ずっと一緒にいたいのに。

「ほら、いきなさいよ」

「オメーは・・・どーすんだよ」

「まだここにいる」

「だったら俺も」

「子供ね・・・大人の姿なのに、いつまでも、子供」

「でも、することは大人、かしんねー・・・ぜ？」

がばりと体を軽やかに起こし、横にいた彼女に向かい合い、それから細い腕を取る。

「灰原」

「近づかないで、人を呼ぶわよ。・・・私、めんどくさいことは嫌いな」

「めんどくさいことって」

「淫乱講師と、その被害者だなんて新聞に載りたくないだけよ」

「・・・」

あんぐりと思わず口をあけた瞬間、さっと手を払われて。少女はにこりと笑った。

「早く、生徒が待ってますよ。工藤センセイ」

いつか、彼女の思いが自分に向きますように。

< i f
: :
中学講師、片思い >

1、中学講師と片思い（後書き）

えーと、これは実は本サイトの拍手小説であり、これをきっかけにこれをテーマにした作品を書くようになりました。アンソロとか、記念小説とか。。。

実は結構はまってます。

ので、ちょこちよこですが、これをテーマにいろんな角度で見た短編集を書いてみたいと思ひまして。

次から書き下ろしでがんばりたいと思いますので最後までよろしくお願ひします。

2、幼馴染への想い ― 円谷光彦の場合 ―

小学生のときから想いを寄せている女の子が僕にはいた。

名前は灰原哀。赤茶のふわふわの猫のような毛が印象的な。

大きくて、でも涼しげなその瞳は、確かに僕と同じ年月しか生きていないはずなのに、なぜか何年も多く、たくさんのものを映しているような気がして。

転校してきた当初は、物静かで、憂いを帯びていた彼女の表情は、僕たちと共に数々の冒険や日々を過ごしてきた中で、少しずつ明るくなったと思う。それでも、その大人びた目線、言葉の数々は変わることもなくて。・・・むしろ、小学2年の冬に転校していったもう一人の幼馴染である彼がいなくなってからさらに強くなったような気がする。まなざしは温かく、僕はそういう彼女にまた惚れてしまったのだけでも。

この数年間、僕は、彼女に恋してきた。長年の片思い。

彼女が、僕に振り向いてくれる日が来るのだろうか。

それは、僕が彼女を超える男になった時なのだろうと僕は思う。残念ながら今の僕は彼女を超えることができなくて。

そして、彼女を超える同年代の男は、きつと現れないと思った。多分、今は。あの人が。・・・コナンくんが帰ってこない限り。彼はきつと帰ってこない。

どこか頭の中でわかつていたから、・・・少し安心していたような気がした。

けれど、それがいけなかった。

去年の冬。

とうとうその人は現れた。

同年代ではないけれど、彼女を。

灰原さんを狙う人。

彼は、危ない。

僕のクラスは担当していないので、接点はない。

・・・けれど。

彼に会うつと、頭の中で常にアラームが鳴る。

いつかはこの人に灰原さんを奪われるんじゃないかって。

赴任してから4ヶ月。今一番気になる相手。

でも、それに気づいたのは、残念ながら先月のことだった。

中学になって2回目のクラス替え。2年D組だ。

僕は、灰原さんと同じクラスになっていた。幼稚園時代からの幼馴染で、あの冒険を共にした同士でもある、元太ちゃんと歩美ちゃんはそれぞれA組、C組で。2人だけずるい！なんてうらやましがられたっけ。

進級して2週間も経てば、クラスでもグループがしっかりと出来上がり、僕は仲良くなったクラスメイトと、教室の窓に腰掛けながら談笑していた。

（あれ・・・？）

目線は斜めすぐ下。

校庭と私道の間には植えられている、もう既に散って黄緑色の若葉が栄えるそのサクラの樹の下で、僕は見つけた。あの、気になる社会科講師と、そして、・・・灰原さん。何を、喋ってるんだろう。気安く、ぽんぽんとその講師・・・工藤センセイは灰原さんの頭を軽く叩き、迷惑そうにその手をのける灰原さん。

『子ども扱いしないで』そう言っているように見えた。

ナンダロウ、コノカンジ・・・。

「はい・・・はいばらさん・・・つつ！！！」

思わず僕は窓の縁^{へり}につかまり、叫んでいた。ハツとして、灰原さんは顔を上げる。そうして僕を見上げると、一瞬顔を強張らせた。そして、工藤センセイも。・・・よりもよって僕の顔を認めると、

ニヤリ。笑った。

むかつ。僕の心は嫉妬の炎が燃え上がる。

「ちょ、ちよつとそこにいてくださいね!」

「えっ?」

僕のいる教室は3階。一緒に談話していたクラスメートを置いて、僕は急いで2人のもとへと走り出していた。勿論、僕のその突飛な行動に、彼らは目を丸くしていたようだけど。

「どうしたの?」

ハアハアと息を切らせて下に下りれば、既に工藤センセイの姿は見えず。

逃げられた。なんて僕はいささか頭にきていて。

「・・・何してんですか。二人きりで」

「何って・・・。たまたま会ったから挨拶しただけよ。学校の先生だもん、当たり前じゃない」

「・・・挨拶だけには見えませんでしたけど・・・??あの人、ヤバイですよ。他の女子生徒にも色目使ってるって噂ですよ。灰原さん、アブナイですよ。食われちゃいますよ」

「色目・・・確かにそうかもしれないわね。・・・でも、私は大丈夫よ」

サラリと答える灰原さんに対して、それでも僕は受け入れることができません。

だって、この7年半、常に一緒にいた僕でさえ、触れることができなかった彼女のそのふわふわな髪の毛を、あの人はいとも簡単に……。

それを触らせる灰原さんも灰原さんだ。

……一応はその手をのけたけれども……もっと嫌がることだつてできたはずじゃないか。

「……何怒ってるのよ」

呆れたように灰原さんは笑う。

「大丈夫じゃないから言ってるんですよ。とにかくあの人は……」

「

「灰原……！光彦！」

「！！！」

頭上から、誰かの声がした。その声は時々耳にする、大人の男性の声。

そして、さっき彼女といたときに僅かに聞こえた……。工藤センセイが、いつの間にか4階の窓から顔を出していた。

「もうすぐ予鈴なるぞ、早く入らねーと遅刻だぞ！」

「・・・・・・・・はい」

一瞬顔を上げ、ため息混じりに目をそらせながら言うと、僕の手を掴んだ。

「戻りましょ」

「あ、は、はいっ」

手を引かれ、彼女のやわらかいその手の平のぬくもりや、暖かさ。いつもならそれで頭がいっぱいになってしまわずなのに。

僕は咄嗟に何かを感じていた。

彼が僕を呼んだ名前に、何処か既視感を感じていて。

あの声のリズム。トーンは違はずなのに、何処かで・・・・。

（ああ・・・・）

僕は気づいてしまった。6年間耳にすることはなかったけれど、頭の一番奥の引き出しに入っていた記憶。

この声の調子は、まさしく。

「コナンくん」
「・・・えっ」

勿論本人のはずないけれど。
僕は確信した。コナンくんの喋りの調子に似てるのだ。
だから、きっと灰原さんは・・・。

「灰原さん。・・・コナンくんのこと考えてたんでしょ」
「えっ」
「だから、工藤センチには気を許してしまいそうになるんだ。
でも、彼とは全然違いますからね！」

僕は自然と腹を立てていた。
コナンくんはこんなやさ男じゃない。こんなプレイボーイじゃない。
い。

そして、きつともう、僕らの前には、現れない。

・・・現実を見てほしい。

あれから、僕は成長している。きっと、彼もまた。・・・だから。

「わかってるわよ、そんなの」

サラリ。彼女が言った。

けれど、少し動揺しているのか、僕の手を握るその手が一瞬弱まって。

僕は離れないようにきゅ、と握り返した。

彼になんか、渡さない。

彼になんかに恋に落ちることなんて、絶対させない。

そう僕は決心したんだ。

< i f . . .

幼馴染への想い

く 円谷光彦編 く
>

2、幼馴染への想い　く円谷光彦の場合く（後書き）

書き下ろし第1作目・・・。

3月21日は光哀の日だしね！

二人の話は大好きです。今回は闘志燃やすみったんで。じえらしーの塊です（笑）。

ここまでお読みいただきまして、ありがとうございました。

3、社会科講師と音楽講師（前書き）

注意：オリキャラ登場の話で、1話に比べ、ちょっと真面目？に考
えてます。

2人きりになるときと、遠くで客観的に彼女を見てしまったときと
の違いを描いてみました。

3、社会科講師と音楽講師

昼休みのチャイムが鳴った。

「起立！礼！」

授業を終え、教室を出て、その男、工藤新一はゆっくりと廊下を歩く。今日は無性に眠たい。

これから給食の時間、しかし自分は帰る時間。

「教師」ではない、ただの非常勤の身である自分の仕事は今日はこれでお終い。

新一は廊下で大きく伸びをする。

「工藤先生、今日はこれで終わりですか？」

「え？」

振り返れば、栗色のサラサラとしたストレートであろうその髪を横で一つに纏めた眼鏡の女性が立っていた。

「あ、まあ・・・」

「あ、よかった。じゃあ、ちょっとランチでも一緒にいかがですか？5時間目に1つ残ってるんですが、今日、寝坊しちゃってお弁当作れなかったから・・・今コンビニでも行くか、近くのお店で一人力フェしようかって迷ってたんです。もしよければ、なんです・・・」

上目遣いでチロリと見上げる彼女は、まるで中学生の、テストの範囲を教^{ねだ}えてと強請る少女たちのそれと何ら変わらない。

「・・・あ、はあ・・・まあ、・・・いい、ですよ」

ちよつと考えて彼は顎を撫でながら答えた。

別に自分は誰とも付き合っているわけではないけれども、どうしても躊躇してしまう。それには簡単には言えない秘密があるわけである。

彼女の名前は、城戸サユリ。年齢は今年の秋で25歳になる彼女は、去年この帝丹中学に赴任してきた音楽講師だ。やや丸顔で年齢よりも見た目は若く、見ようによつては高校生のようにも見える童顔のその女性は、この学校の生徒。特に男子にとつてもない人気がある。いわゆるアイドル顔のかわいらしさと華やかさ。そして天然な性格・・・。人気が出ないほうが可笑しいと誰もが言う、そんな彼女。素直で気立てがよくて、職員の中でも高評である。そんな彼女。

だけど、何だか苦手だ。何がって言われると彼自身困ってしまうのだけでも。

彼女の発するオーラが何か彼の中の信号が捕らえているのかもしれない。

探偵としての？それとも、人間としての？

それはまだ不明だが。

二人で職員室を出て、下駄箱の前に来たとき、ふと足を止めた。職員玄関の向こうで。校門までの大広場。公園のようなその広い緑の芝生が整ったその場所で、ベンチに座る見覚えある少女を見かけた。

(やべっ・・・)

思わず彼女から見えない、死角の場所に隠れる。別に同僚と肩を並べているだけなのに、何だか気まずい気持ちになって。それからもう一度、その死角　　下駄箱の陰から、そこにいる一人の女子生徒の様子を覗き見た。多分、あの娘は・・・。

赤茶のふわふわとした髪 of 彼女。ここに入る前に、何度染めると生活指導の教師から叱られたという曰くのあるその見覚えある髪を持つ、少女。

「あら、灰原さんだv」

サユリが新一の視線の先に何があるのか、それに気づき、彼より先にその名前を呼んだ。

灰原哀。帝丹中学2年D組。新一の隣の家に住んでいて、そうしてとある由縁を持つ彼女。そうして、今の彼女にとっての　　世界で一番、大切な人。年齢は、『見かけ』は10も離れているけれど。

「お昼時間・・・いつもここで食べてるんですね、あの子。F組の、吉田さんと・・・私の時代は全員が給食だったからなあ。お弁当を食べたり、コンビニで買ったりできるなんて、高校にならないうとそんなことできない、って高校デビューを夢みてた頃で・・・。ホント、そういう意味でも今は本当に自由になりましたよね」

クスクスと小さく笑うサユリの横で新一は別のことを考えていた。帝丹中学は、給食でも弁当でもどちらでもOKのシステムで、前月の中ごろに、翌月の献立を張り出され、メニューによって食べるか、お弁当などの持込にするかと希望を出すシステム。自分の好きなメニューのある給食を択べるので、残飯が減り、また、無駄に作る量も減ったと職員は喜んでいるようだが。歩美は時々給食を食べ

るようだが、哀は毎日自分で作った弁当を持ってきていることを知っている。今日もきつと……。

「でも、灰原さん本当にえらいですね。年の離れた親戚の方と2人暮らしたっていう……小学1年生のときからそうだったとか」
「……そう、みたいですな」

軽く相槌を打ちながら、新一は下駄箱から靴を取り出し、履く。でもその10秒くらいの間、視線はベンチの先の彼女。どうしても目が行ってしまう。……勿論、サユリの話は上の空。彼女がいなければ、歩美が来る前に灰原の元へ行けるのに。もしかしたら、10万分の1の確率だとしても、弁当の中身を貰ったりもできるかもしれないのに……。

……なんてこんなバレバレの場所でそんな行為をしては自殺行為、か。

フツと現実に戻って、それは自分のしがない妄想でしかないことに思い知らされ、苦笑する。
でも。

哀がピンクのハンカチで包まれた弁当を自分の座る横に置き、フアッション雑誌を開き、読み始めているとき、その彼女の前に立ちはだかる人物を見つける。

男だ。……というより、少年。哀と同年齢の。

けど、光彦でも、元太でもない。土埃がつき、少し薄汚れた体操着を着たその少年は、確か哀と同じクラスの、牟田邦彦だ。楽しそうに談笑している彼の姿に、新一の気持ちはメラメラと何か嫉妬の炎が燃え上がって。しかも、邦彦は彼女に何か言い、蓋を開けさせ、その汚い手でひよいと彼女の弁当の中のイチゴを見つけ……。食

べた。

「やつ、ヤロオ・・・!!!」

今、自分のしたかったことを目の前で、若干14歳ごときの少年にいと簡単にされて。今、ここで飛び出して哀と邦彦を引き剥がしたいくらいに怒りに燃え上がっている自分がいた。

それでも飛び出さなかったのは、哀に嫌われたくなかったから。今の関係を壊したくなかったから。・・・それでも。

「先生？どうしたんですか？」

ひよいとサユリのおどけたような表情で顔を覗かれ、一瞬我に返った。

「え？」

「すごい怖い顔してますけど・・・？灰原さんと牟田くんがどうかしました？」

「ど、どうも、って。・・・いや、別に何も・・・」

「・・・そう？・・・でも、今・・・。あれ、灰原さん・・・笑った」

「え？」

イチゴを摘んで食べた邦彦と、それを呆れた表情で見ていた哀。けれど、急いで飲み込んだのか喉に詰まってむせこみ、そうして手に持っていたペットボトルのお茶を流し込んでいる。その様子を見つければ、呆気にとられていた彼女が、・・・笑ったのだ。さほど可笑しかったのだろう。

「・・・かわいい」

何気もなく、サユリが言った。

「私たちオトナの前ではそんな風な表情しないから、今ちよつとビックリしたけど。・・・年相応な表情……。なんだ、するじゃない。・・・私たちのこと、そんなに信用してくれないんでしょうか」

「・・・」

「普段からそんな表情してくればいいのに、ね」

「・・・いいんだか、悪いんだか、ですよ」

「え？」

思わず、呟いていた。

自分のモノじゃないのに。

彼女が人の前でコロコロ笑ったり、怒ったり。表情を豊かにするたびに、それが自分のために向けられたものではないことに傷つく自分がいる。

彼女はあの頃みたいに。コナンのときほど自分に向けて心を許していないと思う。あの頃は、彼女のよりどころは、自分は博士と同じ位置か、それ以上の位置にいると思っていた。だけど、今の自分の立場は。見えてこない。

彼女と会いたいがために、彼女と常に一緒にいたいがために、好きな仕事を辞めてここに来たのに。現状は悪くなるばかり。

彼女が怒るのも見方によっては無理がない。けれど、それでも自分分は。

『俺は、灰原といたかったのに・・・』

まるで今の自分は、ガラスのケースに閉じ込められているような気がして。ガラスの向こうから、彼女を見ている。そんな感じで。

「先生？」

「え？」

「・・・もう、行きましょつか。お腹すいちゃった」

「あ、・・・はあ」

チロリ、もう一度だけ新一はベンチに座る哀を見つめた。イチゴを喉につかえた後、お茶を流し込んでもうすつきりしたのか、既に邦彦は彼女に別れを告げて、給食の待つ食堂に足を向けていた。そしてそれを穏やかな表情で見送る少女。自分には気づかず、口元を緩めて。

そんな彼女を見つめると、イライラが増して。

「なんで、戻っちまったのかな」

「え？」

「いや、別に」

同じ目線に自分は立てない。そう思うと、チリチリと胸を焦がす。こんな気持ち、きつとあいつは知らないのかもしれないけど。・・・いや、わかってるか。だけど、きつと口にはいけないこと。・・・口にしたら、きつと彼女をさらに傷つける。それでも、近くにいたい。それでも、笑ってほしい。自分の前で、自分のためだけに。いつになるか、わからなくても。

「あいちゃん！ごめん、先、食べてて、今まだ係の仕事終わらないのぉ！」

はつと頭上から聴こえる女子中学生の声。

向かいの校舎の3階から手を振るのは、彼女の幼馴染で親友で、そして自分のかつての仲間で、今の受け持ちの女子生徒。彼女からもこっちの姿は見えないようで。哀もまた、オツケーのサインを作った。そうしてしまいかけた蓋を再び開け、箸箱に手をつける。

「私たちも、行きましょうか」

「ああ、そうですね」

再び足を前へ進めた。意識的に彼女の死角を狙って歩いたので、哀に気づかれたはずはないのだけれども。

ベンチの横を通るとき、サユリが自分のスーツの上着の裾をぎゅ、と強く握ったのを、彼は気づくことはなかった。

だって、やっぱり哀のことをずっと考えていたから。

< 社会科講師と音楽講師 >

4、社会科講師の誕生日（前書き）

誕生日前に書いてたやつが、ようやく書き終わりました。
当初のものとは、全然違ったり（笑）。ま、いつか。

好き放題、気楽に書きたくではじめたものなんだけど・・・。
結構苦戦してた。

短編ということで、あまり気にしないで見てやってください（笑）
お手柔らかに！

4、社会科講師の誕生日

5月4日。

今日は、彼、工藤新一の24回目の誕生日であつたりする。別に今更誕生日なんて気にする必要もないのだけれども。

たまに学校に隠れて警察の手伝いをして事件を解くこともあったが、世間に顔を出すことも殆どなくなったというのに、この時期になると未だに誕生日おめでとうの手紙やプレゼントが溢れるようにやってくる。

勿論、未だに警察の手伝いをしていることは、哀にも話してないことであつて。きつとバレるまで、自分から話すことはしないだろう。結局辞められないじゃない、といわれるのも嫌だつたし、また変に彼女を追い詰めることはしたくなかつたから。

そして今日も彼は事件現場にいた。もうすっかり陽も暮れたというのに、まだ彼は家に帰れずにいて。というかきつとまだ帰れる当てもない。何やってるんだか、と自分でも思ふけれども。

行き先は、同じ関東圏内でも東京ではなく群馬県警の管轄場所。山村警部の横で今日も事件を解決する。GWだから学校は休みだろう、とたかをくくつて、溜まっていた未解決の事件を解決して貰おうと呼ばれたようだけど。群馬に昼ごろ着いてから、立て続けに4件の未解決事件を解決した。流石に疲れが新一にもあつて。はあ、と大きく深い溜息をつく。

それと同時に、ぐう、とお腹が鳴った。

そういえば昼飯を食べたのは何時いつだつたか。

確か、あれは群馬に向かう電車の中で食べた駅弁か。朝と昼の兼用で。

あれからすでに7時間経っていた。

折角のGWだというのに。誕生日だというのに、一体自分はここで何をしているのか。ふと自問自答したくなる。

・・・とはいえ、自分はそれほど自身の誕生日に拘りもなく、その上この仕事は好きでやってるボランティアなようなもので。

そうして、今日の仕事も群馬県警の山村警部から送られてきた。いつもならスルーしてしまうこともあるのだが、警察宛に犯人から送られてきたというその内容が、暗号が箇所箇所に入っていたものであつて。興味をそそられ、いてもたってもいられなくなつて電車に飛び乗った自分の責任。そうして、『君への誕生日プレゼントだよ』だなんて、山村警部が次から次へと持つてくる未解決の事件を解くのも楽しくて、ずっと群馬県警察本部から離れられずにいたのも。

そんな訳で、気がつけばこんな夕方になつてしまったのだ。ケータイから確認しても、好きな人からの、おめでとうの言葉もないまま。その結果今更一人、落胆なんかしてしまつていて。

だからすべては自業自得なのだ。なのだけでも。

（・・・つか、アイツは俺の誕生日なんて覚えているのかな）

覚えている、なんて答えられる自信は全然なかった。
ぐう、とさらにもう一度お腹が鳴る。

（あああ、腹減つたなあ・・・）

こんなときに浮かぶのは、ほかでもない。やっぱり、ただ一人。
灰原哀の顔。

すぐには会えないところにいるからこそ、余計に会いたくなる。

久しぶりに哀の作った御飯が食べなくなった。哀の作った御飯なんて、そういえばここ数ヶ月食べていない気がする。それは、新一が哀の学校に赴任すると決めて、彼女に告げたときから。

この、距離が憎い。

もう一生作ってくれないのかもしれない。

それとも、新一がこの講師という職業をやめれば、あるいは新一と哀が話して和解することがあれば、作ってくれることもあるかもしれない。けど、今は頼んだってムリなのかもしれないけれど。けど、やっぱり彼女の作ってくれる料理が食べたくて仕方なかった。

『……夕飯、頼む』

いつもはすんなり打てるケータイの文字も。ひとつひとつ、ボタンを押すその指は重かった。

そうしてようやく文字を打ち込むと、祈るような気持ちで、ぴつと送信した。

哀が、自分のために作ってくれるのを信じて。

家についたのは夜の21時を少し回っていた。

鍵を開け、誰もいないことを確認すると、小さくため息をつき、すぐにまた鍵を閉めて家を離れる。

そして、向かうところは。

ピンポン……。

隣の家の阿笠邸。チャイムを何度か鳴らした後、ガチャリとドアが開いた。その瞬間、ブブブ、と着信が入ったが、その電話を無論、確認することもなく。それは3回鳴って切れた。

出てきたのは、哀。ピンク色のシンプルな柄のエプロンを着て、立っていた。少し怒ったような不機嫌そうな彼女。

「……はいば……」

「遅かったじゃない。……何してたの。……“夕飯 頼む”

なんて、偉そうなメール寄越よこしといて、帰りが遅いってどういうこと？」

「こつ、ここ来る前に1通入れといただろ、メール」

「だからそれが遅すぎだっていうの」

「……あれ、待っててくれたのか？」

「いいえ。博士ととつくに食べたわ」

その言葉に軽く落胆する。相変わらず彼女は前よりも冷たい。そうしてそのメールを一通だけ寄越して、その後、連絡をしばらくし

てこなかったことに対して、余計に腹を立てているのだろう。きつとこの分では自分用の料理すら残していないような、そんな絶望的な気持ちにもなった。

「・・・博士は？」

「偶々（たまたま）海外に転勤したという中学時代の友人が日本に帰って来ているって連絡を受け、急遽お酒を飲みに行ったわ」

サラリと哀が言うから、その言葉に思わず新一は目を丸くする。

「・・・いいのか？」

新一がコナンのときから食事制限をされていたというのに。

博士は哀が厳しく食事管理をしていたのに、それに隠れて食べていたことが災いし、最近糖尿病が少々悪化していて、哀が嘆いていたというのを、歩美経由で伝わっていた。そんな博士が、1度御飯を食べた後に飲みだなんて・・・。

主語がない問いにも拘らず、哀は新一のその言葉に何の意図があるのか理解^{わか}っていたようで、不機嫌そうに言った。

「よくないわよ。・・・80キロカロリー以上摂取すればわかるように、反応するセンサーを、口の中に付けてもらった」

「・・・ふーん。・・・で？そのセンサーが反応したらどうなんだ？」

「軽く電流が流れ、私のケータイにもその情報が行き着く」

「・・・そりやかなりの生き地獄だな・・・行かないほうがよかつたんじゃないの？」

「そうでしょうね・・・」

ぷつと新一は噴出し、顎に人差し指を当て、「ふーん」とつぶや

く。

にやり、したり顔。

「何？」

「でも、それなら好都合、か」

目の前にあるその小さく華奢な手をとろうとすれば、哀はさっと手を引っ込めて、それからさっさと居間の方へ歩き出す。そんな彼女に思わず苦笑いを浮かべて、新一は宙に浮いたままの手をポケットの中に突っ込んだ。

「あいかわらずツレねえな。オメー。・・・そういうとこ、何とかならねーの」

「ならないわよ、絶対ね。・・・私とあなたは生徒と先生でしかありえないんだから。変な噂流されても困るし」

「流されたらデマだって言えはいいいじゃねーか。ただこうやって飯食いにくるだけだろ？家も隣同士なんだし。博士は俺の知り合いで親しい人なんだし。博士に会いに行ってる、とかそういえばいいじゃねーか。・・・それが。何か疚しいこと^{やま}をしたいわけ？」

にやり、わざと『そういう目』で哀を見つめれば、パシンとその頬を軽く叩かれた。ホントに、軽く、だけど。

「何考えてるか知らないけど・・・私は」

「いつまでも過去のこと引きずるなよ。俺は今を生きたいの。オメーと」

「そんなわけには」

「いかねーよな、でも、俺は」

哀の手を掴み、新一は哀を見つめた。じつと、哀を、哀だけを見

つめていた。

その視線に射すくめられたかのように、哀は動揺した表情で新一を見つめ返していて。

「やめ、て。・・・離して」

「離さない。俺は」

勝手なことだとわかってる。博士がそれを知ったらどんな風に言うだろう。絶縁されるかもしれない。けど、そのすべてをなくしてまで、自分は。

p r r r r・・・

p r r r r・・・

電話が奥の部屋から鳴った。ビクンッと体をこわばらせ、哀はその手を振り払う。それから「じゃあね」とドアを軽く閉めて、奥の部屋に歩き出した。閉められる直前に足で止めたから、結局は目の前が扉で彼女の姿が見えなくなることはなかったんだけど。

「・・・はい、阿笠です・・・ああ、博士。大丈夫よ。・・・うん、・・・そう、無事会えたのね。よかった・・・え、ダメよ、はずし方は教えてあげない。当たり前でしょ」

奥の方で志保が電話を話している様子が見える。ホントに父娘の会話のようで。二人の間はこの7年の間でさらに縮まったようで。電話でクスクスと楽しそうに、愛おしそうに、電話の主と会話する、そんな様子に、新一はまた小さくため息をつく。そうしてこっそり博士に妬いた。

相変わらず自分と哀は平行線上のまま。それどころか、元に戻っ

てさらに距離は開いた様子。はたして、二人の距離が縮まること、交わることはあるのだろうか。ないに等しいんのではないだろうか、なんて不安は常にあつて。

けれども。

「いまさら、コナンに戻るわけ、ねーしな・・・」

5月4日。今日は新一の誕生日。24歳になって、一番寂しい誕生日を過ごすことになるかもしれない。・・・そう仕向けたのは自分だけ。ハア、と小さくため息をつく。

そうしてドアはパタリと閉まり、それを背に、空を見つめる。

5月の夜風は涼しく。

月はこんなに綺麗なのに。未だ自分の気持ちは満たされないまま。ぐう、と腹の虫が小さく主張した。

カチャカチャと音がして、はっと我に返ると、ドアノブが何回か回っていて。

あわてて新一は体をのけた。

ようやくドアノブが開くと、その様子を肩越しに見ていると、哀が呆れたような表情で新一を見上げていた。

「・・・何してたの」

「・・・いや、ちよつと・・・」

「お腹空いてるんじゃないの？」

「・・・空いてるけど」

「できあがつてるんだから、持っていけば？人に作らせたくせし
て、手ぶらで帰るの？」

「あ、・・・ああ。ごめん・・・」

手渡された袋の中に入ったそれは、フライドチキンやから揚げや
サンドイッチや天麩羅や・・・それが、すべてタッパーの中に入
ってあった。

「これ、全部？」

一人じゃ食べきれない量。明日の夕食分にまで回しても大丈夫そうだ。

驚いて、新一は袋の中のそのタッパーと、哀の顔を何度も見比べた。

「博士には」

「もちろんあげたわよ。少しずつ、だけど」

だから余計に食べさせたくないのだろう。なるほど、合点がいった。

「・・・誕生日、おめでと」

唐突に言われた言葉に、思わず目を丸くする。

「気づいてたのか」

「偶々ね。・・・それに、急にあんなメール来れば、何か今日あったかしら、なんて気づくに決まってる。それを仕向けたのはあなたでしょ」

「・・・そんなつもりはなかったけどな・・・」

「そう見えたわよ。・・・プレゼントは形に残ってしまっし、あげるつもりはなかったけれど、食べ物なら後に残らないから」

哀の言葉ひとつひとつに、嬉しさがこみ上げてきて。

「・・・あれから、もう何ヶ月だろ」

「え？」

「オメーの作ってくれる飯を食えなくなったのは」

「バカね、自業自得よ。・・・あなたがそういう道を選んだんでしょ。・・・私たちはただのお隣さんの関係じゃなくなったの。生

徒と先生の関係。大切な恋人も、職も捨てて。順風満帆だった人生から、この奇妙な道に方向転換したのはあなたでしょ」

サラリと言い切る哀は、やっぱりクールで、大人びていた。14歳でも、もう立派な大人な女性の表情をして。

「それでも誕生日くらいは何かあげてもいいかな、って思っただけよ。それが、あなたが欲しがっていたそれと一致しただけ」

それは遠まわしな物言いだけど。

「相変わらず素直じゃねえな、オメー」
「そう？」

少しだけ動揺したその表情があまりに可愛くて、ぎゅっと強く抱きしめたくなるけど、それでもそうすることで、哀に嫌われたくなくて。この状態を維持し続けたくて。

せつかくの誕生日、やっぱり大好きな彼女には一番いい表情をしていてほしい。

「・・・灰原」

「何？」

「やっぱ1人じゃ食いきれねーよ。・・・一緒に食わね？」

「イヤよ。夕食は普通に食べたし。・・・夜9時に食べたら太るんだから」

「少しくらい太っても平気だよ、オメーなら」

「勝手なことって。それで太ったらどうしてくれるの」

「俺が責任取るよ、それくらい」

「どうやっ・・・」

そこまで言って、新一が意図することが哀にもわかってしまったかのように、はっと口を噤んだ。

「いいわよ、取らなくて。・・・一人で生きてくから」

「・・・プツ、何だそら」

新一はおかしくなって笑った。拗ねたような表情を見せる哀に、また愛おしさがこみ上げてきて。でも、きっと今日はこれ以上は一緒にいられないのだろう。そうわかっていたから、もう口を出すことはできなかった。

自分のことを嫌いではないということにはわかっている。

でも、多分ある程度来た場所からは踏み込みではいけないことも、踏み込みたくても、これから新一が哀と距離を近づけるには敢えて、踏み込まなくちゃいけないことも。

きっと今はタイミングは違うし、今踏み込んだらさらに距離が離れてしまうことも、わかっていた。

「ありがとな、灰原。・・・また、学校でな」

「ええ」

「戸締り、しっかりしとけよ。ホント、物騒だからな」

「・・・大丈夫よ。博士が年頃の女の子を一人にして何も対策もせずに家を出ると思う？」

「え？」

「私が博士にセンサーをつけてもらったように、博士もつけてたのよね。ドアや扉に、そういうセンサーが。・・・21時以降、誰か来たら博士に連絡行くように」

「すっげ・・・」

「それで、もう一人連絡が行ってたりするの」

「・・・え？」

「・・・着てない？着信」

「!？」

携帯電話を開けば、確かに存在^{あつ}した、電話をかけた相手が不明の、着信。そういえばドアを開けた瞬間に誰かからの着信が入っていたことをいまさら思い出す。

「そっか、だからさっき博士からも電話が」

「そう。でも、あなたが来るのは知ってたから、念のためでしょうけど。・・・それに、歯についてるセンサーのはずし方も訊きたかったのも本当でしょうし」

「ふーん・・・。一言くらい俺にも連絡くれればいいのに・・・」

ボソリ、本音が出てしまうけれども。

それでも、博士には自分が信頼されているわけだ、と新一は思う。

それは自分が哀の通う学校の教師だからか。いち大人だからか。25年ずつと見てきた旧友のようなものだからか、灰原哀が自分を頼っている姿をこの7年間見続けてきたからか。

だからこそ裏切るときが来るのが怖かったりする。博士に知られるときに、怖かったりする。

いや、それとも。すでに自分の気持ちを知られているとしたら？自分のいない時に夜中勝手に哀の家に忍び込んで、疚しいことをしないように、博士が牽制をかけているとしたら？少しでも深呼吸して自分を振り返れる時間を作るために、博士が。

「ハハ、まさかな・・・」

思わず苦笑する。まさか、そんなことがあるはずがない。

「何？」

怪訝な顔で、哀は新一にその言葉の真意を確かめようとした。

「いや……。……。それじゃ、ごちそうさま。また明日な」

「ええ、おやすみなさい」

「おやすみ」

バタリ、とドアが閉まって。

21時半の夜空は、相変わらず月で明るく、綺麗で。

新一は、大きく溜息をついた。

今日は、一歩。ほんの一歩だけかもしれないけど、少し前進できた気がする。

5月4日。彼の24歳のプレゼントは、最後に、今の彼にとっての最高のものとなった。

5、音楽講師と花火大会（前書き）

花火ネタ、大好きです。

ちなみに私、8月1日、灰原の日に、『江戸川花火大会』見てました！。マツキー好き仲間と総勢14人ほどで。

コナンの花火はありませんでした！。
当たり前ですが。（笑）

5、音楽講師と花火大会

浴衣を着る。萌黄色の中に朝顔が綺麗に咲いたとっても可愛らしい模様柄の。

サラサラのストレートの髪をアップにする。小花があしらわれた簪^{かんざし}をさす。

メイクをする。二重^{ふたえ}の際に、深緑のアイライン。
紅^{べに}をさす。グロスもたっぷり塗っていく。

眼鏡をとった自分はこんなにかわいいのに、どうして見せる相手がいないのだろう。

かわいいよって笑ってくれる相手がいないのだろう。

あの人に、見せたいのに。いつも学校でしか会えないけど。
いつもと違う自分をあの人に見せたいのに。
それもかなわないなんて。

「コロン、行くよ」

私、城戸サユリが玄関で靴をトントンとつま先を叩きながら引き戸を開けると、コロンが犬小屋から飛び出て、わん、とうれしそうに尻尾を振った。

飼い犬で雑種の、2歳の（メス）。

浴衣で犬の散歩なんて珍しいのかもしれないけど、そうでもしなければやってられない。

寂しさをごまかせるのは、わかってくれるのは、やっぱり独り身のコロナだけ。

私は、外しかけた眼鏡をまた装着した。

お化粧しても、何をしてても、誰も見てくれないから。似合ってるよ、眼鏡外したんだ。なんて笑って褒めてくれる人は、誰もいないから。

それでもコンタクトがないのに、夜道も危ないのに。おしゃれするただけに眼鏡を外す、意味もない。

8月8日に米花町で大きな花火大会がある。それを知ったのは1ヶ月半ほど前のことだった。同じ職場に勤めていて、片思い中の工藤先生を勿論誘ったのに、その日は先約があるからと断られ。仕事を終わったあと、2人で食事に行く事はあれど、改めてデートをすることがなくて。誘っても1度も成功したことがなかったから。まあ仕方ないかなとは思っていたけど。その後誘った2人の友達にも、浴衣を着終わった直前に、熱が出たとかでキャンセルされて。もう一人にはそのことを連絡したら返信が来ないので電話をしたら、仕事が煮詰まっっていて終わらないからパスと。

「熱や仕事だったら、仕方ない、…よね」

カランコロンと下駄を鳴らしながら歩いていく。自宅から歩いて15分の距離だ。花火大会はあと30分ほどで開始。夕焼け空が綺麗で、コロンを散歩させながら、河川敷へと向かう人通りを観察していた。

ちょうど目の前にいたのは、浴衣を着た男女。既に手を繋いで、あとほどなくしたら始まる花火大会を楽しみに会話が弾んでいて。

これが、自分と工藤先生だったら、と思う。

手を繋がなくてもいい。

恋人じゃなくてもいい。

ただ、笑って隣にいてくれたら。

コロンじゃなくて。

コロンには申し訳ないけど。

あのとき、先生が、『いいですよ』って、一言言ってくれたら。

私は一人じゃなく、こんな寂しい気持ちじゃなく。

笑顔でいられたのに。

米花駅を通ったころだった。

「先生」
「」

ふと、声をしたほうを見る。駅とは反対方向から元気よく走ってきたのは、2年C組の吉田歩美だ。

水色の浴衣が可愛い。そうして、後から送られて来た少年は、私服姿のD組の円谷光彦と、A組の小嶋元太。

どれも自分の働く学校での、受け持ちの授業の子たちだ。

「あら、吉田さん、奇遇ね。貴方も花火大会？かわいい浴衣着ちやって。似合うわよ。…それに、…モテモテね。両手に花じゃない」

クスクスと笑いながら顔を赤く染めている少年たちを見る。両手に花という言葉が果たして今の状況に合うかはわからなかったけど、確か男女反対のことを言うのではなかったか。それでも彼女はその意味に関しては知ってか知らずか、否定することなかった。

「ううん、違うよー。あと、3人」

「3人？」

「そう。車で来てね、さっきまでレストランでお話してたの！。後ろ歩いててね、先生見つけたから飛んできちゃった。すごいだよ」

「そうだったの。大人がいるから、夜道は安全ね…って、その大人の人って、ちゃんとした人なんでしょうね？」

少し教師ぶって聞いてみる。ここにいるこの子達が怪しい人たちと付き合うとは思えない。小学生のときは探偵団なんていうのをやっていて、実は警察とも顔見知りだということは話は知っていた。しかし、万が一のこともあるから。変な人と付き合っているのだったら一大事だ。

「うん 先生の知ってる人だから大丈夫だよ」

「え？」

吉田さんはそういいながら、私の後ろに隠れておどおど様子を伺っているコロンに手を差し伸ばしている。怖気ながらも、鼻をうごめかし、ペロペロと控えめに彼女の柔らかそうな手を舐めるコロンの様子を見ながら、私はもう一度聞いた。

「私の知っている人？… ってことは、警察の人じゃないわね。… 帝丹中の生徒？親御さん？」

「うん、一人はそうだけど、もう一人は…。… あ、やっときた。先生、哀ちゃん！はあかせえ！！！」

「…！？」

振り返れば2人の大人と、1人の少女。
そのうち、確かに自分は2人知っていた。

一人は、帝丹中の生徒で、2年D組の灰原さん。
そうしてもう一人は。

もう一人は、同じ職場で働いている帝丹中の社会科講師。
… 工藤先生。

私が、一緒に行きたかった相手。

やっぱりカランコロンと下駄を鳴らし、紺色の浴衣を着て。
… ああ、やっぱり素敵だ。とろけてしまいそう。

横には恰幅のよい白髪まじりの禿頭。初老の男性がいた。
それは誰の保護者だろう。なんて一瞬思いながらも、そんな細かいことは今の自分には最早どうでもよかった。

工藤先生は、驚いた様子で私を見ていた。

「城戸先生……」

「先生っ……び、びっくりしましたー！先約ってこれだったんですね！」

だんだんテンションがあがってくる。これで、綺麗だねって褒められたら、私の思考はどこかへ飛んでしまいそうだ。

先約とはこれだったのだ。彼女とじゃなかった。

なぜ学校の生徒と花火大会にいるのか、彼らとどういう関係かはよくわからないが、それでも一緒に行った相手が彼女じゃないとわかっただけでうれしかった。

もし運がよければ、この輪に入れるかもしれない、とも。

そうして、工藤先生の隣に行けば、とってもお似合いのカップルに見られるのかもしれない、とも。

「ああ、うん。……そうです」

はにかんだ笑みを浮かべる。やっぱり素敵だ。

「そう、最初はね、僕たち元少年探偵団のメンバーで行こうって決めてたんですよ、そーしたら先生が急に俺も付き合うよ、なんていいだして。そしたら、博士まで」

「……そんな要らない人みたいに言うなよ、かわいそうだよ！」

「そうだよ、光彦くん……。いいじゃない、大勢で行った方が楽しいもん。工藤先生、カッコイイし、博士はずっとお世話になってる人だしさ」

「カッコイイとかお世話になってるとか、そういう問題じゃないんです！今日は僕たちだけで行きたかったのに……」

目の前で憤る^{いきどお}円谷君と、それを嗜める^{たしな}吉田さんと小嶋くん。こん

なに怒りやすい人だったわけ？と思いながら、私は微笑んで見ていた。というか、微笑むしかない。浴衣姿の彼があまりに強烈過ぎて素敵過ぎて。

「毎回工藤先生にジャマされて……」

「ジャマっていうなよ。オメー、さつきからずっとそーじゃねえか。何なんだ、さつきから」

苦笑いを浮かべる工藤先生。『さつきから』だなんて、いつから彼らと一緒にいるのだろう。

なんて生徒思いなんだろう。でも、それを知ったらきつと校長とかに怒られる。鼻^{ひいき}真だなんて、他の保護者に言われると、注意を受けるだろう。

どんなにこの生徒たちと仲がよいのか知らないけれど、隠していたほうが身のためだと思った。そうしてそれが、自分と工藤先生との秘密の共有、絆が生まれる。

二人が言い争いを続ける中で、私は本当に浮かれていた。だから、次に何があるかだなんてわかっていなかった。先生と子どもたちとの関係を聞くこともしなかった。聞こうともしなかった。だからバチがあたったのかもしれない。しっぺ返しがきたのかもしれない。そう後で思った。

目の前では、なおも円谷くんが怒声を上げていた。珍しいくらいに。

「だってジャマなんですもん。ホントジャマジャマジャマ！博士より、先生の方が、断然ジャマです。早くとっとと仕事戻ってくださいー」

「なっ、オメー、学校の先生に向かってそんなこと……」

「先生って言っても、担任じゃない、ただの講師じゃないですか！？どーせ灰原さんがいるから先生している癖につ。卒業したらとつと辞めて探偵に戻るんじゃないですか？それとも今度は灰原さんが入学した高校講師になれるおつもりですか！？」

「なっ…」

「円谷くん…」

彼の言葉で、一気に浮かれていた気分が冷めた。
なんだろう、この単語。今、なんて。

目の前で、みるみるうちに不機嫌になっていく工藤先生。
そうしてその時になって初めて先生の隣で心配そうに円谷くんを見ている灰原さんを見た。

「光彦、オメー少し、言いすぎ」

ぼそつ。ととうとう彼が吐き出した。ギロリ睨んだ彼の瞳^めは、ちよつとだけ、怖かった。

「~~~~っ！！言いすぎじゃないです！言いすぎじゃないですよー！」

まだ花火大会が始まっていけないのに。早く帰りたいと思った。
険悪な雰囲気。早く、逃げ出したいと思った。

これ以上、聞いていたくない。

私の浮かれた気持ちも、膨らんでいた風船も、シュワシュワと小さく萎んでいつて。

ごくり。

私は思わず生唾を飲み込んだ。なんとか状況を理解しようとして

も、できなくて。どうしていいか私自身、わからなかった。

「…はあ」

横で大きく溜息をつくのは工藤先生。

「…わかったよ。離れりゃいいんだろ？…博士もいるし。俺、用なしな？」

「…え？」

「工藤先生？」

驚いて、皆が先生を見た。

「光彦このままだとずっと怒らしたままみてえだし。ちょっと離れてたほうがよさそうだ。…城戸先生。…付き合ってくださいか？」

「…え？あ、ハイ」

どうしたんだろう。全然うれしくない。ただ、なんだか胸の中がシクシク痛んでいた。

どうしてこんな修羅場にめぐり合わせてしまったのだろう。

どうして、その、渦中の人が、この人なんだろう。

彼が。

目の前のこのソバカスの14歳の少年が口にした言葉が、今も耳について離れない。

――どーせ灰原さんがいるから先生している癖につ。

勢いまかせていったのかもしれない。

なのに、こんなに胸に残るのはなぜだろう。

歩き始めた工藤先生に気づき、私は急いで彼を追いかけた。
一瞬、それでも振り返り、あの少女を見た。
思いもかけず目が合い、さっと目を逸らす。

いけないものを見てしまったような気がした。
気のせいであってほしいと思った。

5、音楽講師と花火大会（後書き）

久しぶりに書きました。この話。ずっと雨と老女の話を書いてたからっ。

夜中の2時に書き始めて、1時間半でだーっって書きました（笑）眠い。。

そして、今回はオリキャラ視点です。いかがでしたか？

短編集なはずだったんだけど、連載ものみたいですね、結局（笑）ま、いつか。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

こういうみったん、書くの実は初めてかも（笑）。

とにかく、新一先生が嫌いっていう設定です（笑）ヤキモチ、だからね。

6、音楽講師と花火大会 2（前書き）

結局続きです（笑）。

新ちゃんと哀ちゃんのやり取りを、次回また書き始めようかと思えます。

6、音楽講師と花火大会 2

薄荷色はっかの空は橙だいだいに、橙色の空は茜色に、そして茜色の空は群青色に。

少しずつ、青みが深く染まっていく空を、そして下を見渡せば少しずつ町並みが白やピンクの人工的な光がポツポツと目立つようになつていく様子を、私たちは神社の境内に向かう階段の最上段に腰掛け、座って見ていた。

そんな私たちより少し離れて、神社の境内のコンクリートに座りこみ、私の家の末女の役割を持つ雑種犬のコロンは、暇を持て余しているのか、茹だるくらしい暑さだった日中に比べ、少しだけ和らぎ、涼しささえ感じる風の匂いを気持ちよさそうに嗅いでいた。これから何が始まるうなんてわかりもしないで。

何を言えばいいのだろう。浮かれていた気分なんて吹き飛んで。ただ、黙って座っていた。

正直、今は空の色の移り変わりなんてどうでもいい。階段から見える景色も、どうでもいいのに。

工藤先生を追いかけて行った先は、花火大会が行われる土手とは反対方向の場所だった。

夜に近づくにしたがつて、不気味さを感じる、神社。勿論、花火大会とは一切関係ない、夜店も何もないところにきたのだから、提灯うちんの光さえもなく。

ただ、自然の光がなくなっていく様さまを私たちは肌で感じていた。

…いや、感じているように見えただけかもしれない。

でも、本当はそうじゃなくて。

私はそれについては一切感じていなかった。

多分今、自分の浴衣を褒めてもらっても、上の空なんだろう、とも思う。

先ほど、うちの学校の2年生である、円谷くんの言葉に私は少なからず動揺していたから。

そして、きっと彼も、また。

「…今日は、帰りましようか」

この重苦しい雰囲気にとつしても耐え切れず、私はついにその言葉を発した。

「え？」

驚いたように工藤先生は私の横顔を見つめる。気配で、なんとなくどんな表情をしているかはわかつてはいたけれど、私は彼を見ようとはしなかった。

感情をあまり出したくなかった。

知リたがるのが昔からの私の悪い癖だった。そうして考えすぎて自分を追い詰めることも。そうやってうまくいかなかった恋はいくつもあつた。彼を追いつめて、もっと悪い方向へ行きたくなかった。単なる一人の少年の言葉で、理解^{わか}りもしないで、一人で翻弄されなくなかった。

「まだ、始まってないですよ？」

「でも……」

「もうすぐ始まる。今から行っても土手の後ろのほうでしょうし。足踏まれたり、迷子になってしまうのがオチだ。……ここで、見てましよう」

「……でも」

「あいつらも、迷子になってなきやいいけどな……」

再び正面を向き、彼は顎をなでながらポツリとつぶやいた。それは本当に『先生』の顔。

『 3、 2、 1 』

大勢の人達のカウントダウンが、土手の方から聴こえた。もうすぐ始まるのだ。そう思った次の瞬間。

ジュン、ジュン、・・・ジュン・・・ジュン

赤、白、ピンク、青、金……たくさんの色の花火が次々と上がっていく。涼んでいたコロンが、何事か、というように、突然立ち上がり、私の背中に隠れ、空に向かってうなり声を上げた。

「綺麗……」

「……ここ、子どものころ、幼馴染とよく来てたんですよ。僕がたまたま見つけた場所で。二人でよくこうして、コンビニで買ったジュースやお菓子を食べながら」

「夜店じゃなくて、ですか？」

「ええ。勿論、そういう花火大会も行きますけど。ここはいつも買い食い。あんな込んでるところに行くより、こっちの方が断然、つて。中学、高校とよく来てたな。……けど、なんだかんだ言つて、昔はよくあいつらといろんなところに行ったけど、とうとうこの場所には教えなかったな」

「……へえ。仲がいいんですね……」

「……さあ、どうなのでしょうかね」

「え？」

今まで花火を見ていたが、意外な言葉に驚いて、彼の表情を伺った。彼の横顔は、少し寂しそうな表情で、笑っていた。

「僕は先生で、あいつら……彼らは『生徒』だから。今は多分距離は置かれてると思いますけどね。……僕は一方的に彼らのことを知っていたけれど、彼らは僕をある程度おつきなうってから知った

ようなものだし。子どものころから知っていた人たちとは違う」

「…工藤先生は、いつから彼らを？ここに赴任してくる前から知っていたということですか？」

さつき訊けなかった疑問をぶつけてみる。

「ええ。知ってましたよ。8年も前から、ずっとね。近所に住む子達なんです」

後から考えると、8年も前から知っていたのなら、この8年の中で彼らと親しくなるきっかけもたくさんあっただろうに。子どもたちが「ある程度」大きくなってからというのはいつなのか、子どもたちといろんな場所に行ったという、「昔」はいつのことなのか。小学校高学年なのか、去年のことなのか、それとももっと以前のことなのか。よく考えてみると時系列もばらばらに思えたし、彼らしくない支離滅裂な発言にも捉えられた。

けれども、それらすべてのことを考える余裕は、その時の私には一切持ち合わせてなかった。

ただ、そのとき思っていたのは、ずっと訊きたかったキーワード、それだけが頭にぐるぐる回って離れなかった。

「…灰原、さんも？」

思わず訊いてしまった。一瞬、彼の表情が固まったような気がした。けれど、すぐに口元を緩ませる。

「ええ、彼女も。…灰原は、隣の家に住む、僕の親の知人に育てられた娘なんです。」

「ああ、…そう、なんですか。…じゃあ」

妹のようなものだ。そう言って欲しかった。だけど、それ以上彼は何も言わなかった。

工藤先生は、彼女に。

…あの子に特別な感情を持っているのだろうか。いち、教育者とその生徒の関係ではなく。

あの子が気になるから、この学校に赴任してきたのだろうか。

確かにあの子は美しい。

実際は14歳だけれども、内面的なものはるかに大人だし、その心情は表情にも、雰囲気にもにじみ出ている。

老けているわけではない。実際本当に美しく、透き通るような肌を持っていて、緋色の美しいふわふわヘアは、まるで人形のようにで。

頭はずば抜けていいが、教師を小ばかにすることもなく。媚も売ることもなく。…面倒くさいことはキライと見えて。

一歩遠くから周りを見ている、というようにも感じる。

暗い性格ではない。友達も、多くもないが、少なくともないし、クラスでも憧れている男女がだいぶ多いと聞いている。

あの性格は、あの雰囲気は、早くに両親と離れ、両親以外の60以上の男の家で世話になっているという、そんな特異な環境にいるからだろうか。

そしてそんな彼女を、彼は心配しているのか。本気で惹かれているのか。

でも、円谷くんはそう2人を見て感じていたのだ。
そうして私もまた、彼の言葉で、片思い中の工藤先生と灰原哀が
繋がることを知ってしまった。

” 彼女のことが、好きなんですか？ ”
” ここに私を連れてきた意味は、なんですか？ ”
” あの子が此処にくるのを先生は、待っているのですか？ ”

それを訊きたくて、口を開きかけたとき。

どど・・・ん

どどど・・んっ

再び目の前に開く大輪の花火、腹の底からわきあがるその音に、私の言葉は胸の中に呑み込まれてしまった。

何も言えず、私は、私たちはただ、闇を照らし、咲き誇る金色や赤色の花火を見ていた。

8月8日。

米花町の花火大会。

最終的に一人ではなかったし、大好きな人といつまでも一緒に見られ。

当初の予定では全然考えることもできなかった。

お気に入りの浴衣に、化粧、髪型だって整えたのに。

どうして、こんなに気分が乗らないんだろう。

会わなきゃよかった。外になんて出なければよかった。考えれば考えるほど落ち込んで。

青みがかった空はいつのまにか紺に、そうしてすべてが終わるころには漆黒に変わっていた。彼と別れ、コロンと一緒に帰路に帰るその足取りは、鉛のように、重かった。

いつもより歩くペースが遅い私に、そうしておぼつかない足取りを心配し、コロンは私の前を歩きながら、何度も何度も立ち止まり、振り返っていた。それがとっても心苦しく、思わず彼女に歩み寄り、抱きしめた。

「だいじょうぶ。泣いてなんかいないよ」

ただ、不安なだけ。

次会うときは、私は工藤先生に、そうして灰原さんと、ちゃんと顔を見て会えるだろうか。

そんな一抹の不安が心中ぐるぐる駆け巡り、しばらく離れなかった。

6、音楽講師と花火大会 2（後書き）

8月8日。

本日に間に合わせたくて（笑）いそいで書きました。

今日も花火大会、どこかであるのかな（笑）

ちなみにあたしは、今日はなぜか、事の成り行きで、「男装喫茶」行ってきます。・・・執事喫茶のはずだったのになあ。。。。

ま、どちらも初体験だったからいいけどサ。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4337g/>

if . . .

2010年10月10日07時41分発行